

破瓜  
by A.Matsu!  
1990~Aug.29,1999  
Vertical Edition: Dec.4,2000  
Title Design: Dec.7,2000

Copyright©A.Matsu!  
Suita City

Winged-White:  
<http://www.ne.jp/asahi/winged-w/fly/>



オレはヴァージンだ。

ヴァージンといっても女のそれではない。オレは男だ。妻もいる。がかえってそれゆえにこの擲論が気に入らない。すへては高度情報化社会の産物。『転』がいけないのだ。

『転』

省略しないで言つと、『転移』である。もっときちんと言つと、『原子配列転送式物質移動システム端末プース』である。簡単に言えば、これを使つて瞬時に他のプースへ移動できるという代物だ。

なぜか、『転』がシステムそのものを言つ時や、『転ずる』と動詞にも使われたりしているが、それほどそのたじろそに出入回っている。ちよつと『昔前の公衆電話並みか、それ以下だ。今や一般家庭用の転プさえ発売され、需要が多すぎて半年も予約待ちの有様だ。』

ビジネスシーンにおいても、もうこれ無しには何も考えられないほどだ。転プ普及前であれば、電話で郵便を使わないでつやつつて仕事を進めるか、という議論に等しい。

当然、先んじてこの悪魔のシステムに魂を売つた奴は、ほとんど出世した。追隨した奴もまあ出世した。

最近身売りした奴も、前途の保証はされた。残つたのはごく少数の、オレみたいな奴だけだ。一番早く転プを普及させて出世した国は、言うまでもなくこの国だけだ。こんなことはいつでもい。

要するに、なぜオレがヴァージンなのか。オレは人間としての誇りを持って、まだこの『転』を使っていないのだ。

何が悪い。

破瓜

破瓜  
られた試作品は、ダイヤモンドを大量生産して人類を興奮の渦に巻き込んだ。時を待たず、記録するやうにハリウッド的発想から、テレビ放送送信するやうにコンセンアの転換は、転時代の到来を予告した。

新橋、横浜間の転プが開通したのは、今から十六年前のことだ。この技術の副産物に感謝するまでもして、あるやうき言つたやうに、転自体の事故も少ないのだが、交通網は通信回線に置き換えられて、騒音、排ガス、ラッシュアワーもついでに無くなった。いやそれ以上だ……『三三三問題』が解消された。物質の原子レベルでの分解と再利用は、すべての都市で懸念されていたこの問題を一挙に解決できた。まあ、オレにとっては街がきれいになつたことが嬉しいのだ。

しかし、自分の所在が脅かされているとなると、話別だ。オレは単なる物質の組成や光信号やプラズマ形成物の塊か？ いや、それ以前に『三三三』と同レベルか？

『転』にも短所はある。再形成する目的地は、それと同じ量以上の原子をストックしてはならないことだ。無論その転から転した人間もいるわけだから、その人間の原子は決定した分子にしてストックされる。そう、なつき『三三三』の分は、一緒にだ。安全に転ずるため、個人別の最新原子量を記録したIDカードを使って、原子量の少ない目的地プースには転移できないという警告がなされる。

なつき、それぞれの転プは残念ながら金や貴金属、重金属類の原子をほとんどストックしていない。転プ泥棒が起ちないのは当然だ。地下のタンクを漁つても、純水とかヘリウムとか、若劣の割にはチチないモノしか手に入らな。

この点で転プがもたらした社会変化は、オレの頭に入つてはつた。ジャラジャラした見栄っ張りな女がいなくなつたからだ。と、まあ、若い

このシステムは一旦人間やその他の物質の原子配列を分解しながら解読して、目的地のプースにデータを転送し、そこで形成しなめるといふもの

だ。自分が、なんとかメカにでもなつたみたいで気持ち悪いだろう。でも、人類はその気持ち悪さよりも利便性をとちまつたんだ。

だいたひ事故が起つたらどうするんだ、遺体確認できないじゃないか。実際事故も何件か、恐怖の八工男状態の恐ろしいのが起つてるんだぞ。それでも、これはオレの反論としては使えない。事故数は他の交通手段に比べ格段に低いのだ。たまた、金儲けが無くなつたりする程度らしい。

事故の無い社会、おおいに結構だ。しかし、オレは思つたのだ。この転プで分解されること自体が、オレにとっては事故なんじゃないだろう

か？

オレ自身は転プに入つて行き先をコルした数秒後、この世から一番残酷な方法で、その一瞬で、無慈悲な機械の中に消えて無くなつてしまつたんじゃないか。実際、生命の威厳とか以前に、オレはそれが怖いの

だ。

無気味なのは分かつている。でも、そんな風にはやらしい目つきでオレをヴァージン呼ばわりするのはやめてくれ。

素晴らしい技術であるのはオレも承知している。二十年ほど前、三次元の物体の構成を、ほんの一瞬で原子レベルまで解析してしまつた方法が発見された。もつともこの方法は特殊なプラズマを照射するので、物体は完全に破壊されてしまつ。おまけに情報が膨大すぎるので、非常に小さなものがデータとして扱えなかつた。

この時点ではまだ日常生活にはほとんど関係がなかつた。

ところががマッドな科学者はいるものだ。情報を逆の位相にしてさきほどのプラズマを照射し、必要な原子のみを供給すれば、いとも簡単に元の物質を再形成できる。という奇々怪々な論文が発表された。この論文を元に作

破瓜  
女の子はこの新しいメジャーに敏感で、転プを使う度に更新されるIDの総原子量を、友達と競つたりするやうな、やれやれ。

話がすすまないな。転プにまつわるオレの話のほすが、大嫌いな転プの説明になつていて、これではオレは転プの営業マンじゃないか。

まあ転プ自体を使えない営業マンなど必難なうたうが、病気を良く知る医者と同じで、敵を知り己を知ればもつて百戦危うからず。まあオレの気持ちはずなな『三三三』だ。……。

そつてまじないか。

結局オレは自分の純粋さを大切にしたいけれど、そのこと自体にいららして、耳年増の、単なる恐がっ。

『ヴァージン』

そつつかい、ああそつたつてま。

オレは社会の波に乗れない、古早けた発想の持ち主なのかも知れない。

『そつつかい、あはははは、写真を撮られるの、お嫌いでしたっけ。』

『そつつかい、人によつては魂を吸い取られるのいいからなあ。ね、カカリチヨーレ。』

あの嘲笑をまた思い出してみました。転プを使わなかつた最後の社員旅行、何年も前のことだ。

彼等の立場で考えれば、彼等の発想も分らないではない。転プを使うと死ぬなつて考え方は、写真を撮られると死ぬなつた馬鹿げた迷信、さほど変わらなないのだろつ。オレにしてみれば、こんな迷信にも少し共感してしまつた。

しかし写真と転プでは語るべき次元が違う。少なくともオレにとっては

そんなのだ。写真は単に光学的な現象だから、物理的に被写体は何らの危害も加えられない。しかし、転写は、オレ、自身を抹消してしまう機械なのだ。目的地にいるのは、オレと全く同一の「コト」に過ぎない、と考えられないだろうか。オレにとって当然のこの解釈は、周りの言うようにやはり、「おかしい」のだろうか。

転写で、「コト」された者は、その便宜さを賞賛する。決して、『オレは一回死んだような気がする』などとは言わない。当たり前だ。「コト」前の人間の知識をそっくりそのまま引き継いでいるのだから。

周囲に先駆けて転写を使用した元同僚の友人も、最初は確かに怖いのが痛くも痒くもない。かえってリフレッシュした気がする。「と、頑固なオレを懐柔したりする。転写の普及前までは、彼とオレは共に営業の第一線を担っていた。が、今や彼は重役、オレは仕事も削られて解雇寸前の貧窮族になってしまった。

たかが人間の「コト」としてオレは抑論されたり意見されたりせねばならないのだ。いやこれは差別の裏返しだが、言うてはいけないことだったな。

時々、オレの意見を最後まで聞いてくれる奴もいた。しかし奴等はそこから先がおかしい。やれ魂は別のレベルにあるだの、意識体は異次元に存在しているだの、現代科学に無い用語でもってオレを説得しようとするのだ。

その言えは、「その和尚さん、御仏を信ずればいのちは一つ」とか言うて転写を容認していた。待てよ、あれはローマ法王だったかな……。まあ転写に反対しちゃうたら、没落は目に見えているからなあ。

**破瓜** 　しかし最近では、そんな親身な説得も無くなった。転写未使用者の減少につれて、『ウァージン』という抑論は流行語の普通名詞から、直接オレを

**破瓜** 　十分遅れて到着した。二時半ほど、時間通りに来たためじゃない。この電車の外観も駅と同じ、数々の「コト」に覆われている。扉は開いたままだ。

全くアナウンスの無いまま、いたって適当に電車は進み出す。そのときの「おっ」と老人は、乗らなかつたみたいだ。乗客はこの車両にたつたの三人。最盛期には一日の乗降客数が世界で五本の指に入っていた。そんな駅から乗ったとは、とても思えない。一人はやけに周りを見回す神経質そうな若者……。若い奴が前の車両以外に乗るのは珍しいな。後の二人はめいめに飲たたくれている老人が、二人とも寝てしま。一日中、この現状になった線路をぐるぐる回り続けているのだな。

前の車両には、集団で騒いでいる若者連が乗っている。二か月前前から前の車両を溜まり場になっているみたいだ。たまたま酔っ払った奴が窓から嘔吐してしま。

往時の活気は「この電車には無い」。そのやけの無さを速度に表裏を現されてしま。二三年前の週刊誌の中心に広告が虚ろにはたため、床には読み捨てられた雑誌や新聞に混じって、空のボトルや雑多な「ミ」吐瀉物や大便、大の死骸まである。あかりもエレクトロも扇風機も無い。車内アナウンスも駅と同じ、無い。

郊外に延びる路線に乗り換えた頃には、夕闇が迫っていた。二十ワットに満たぬ電灯が灯き始め。とほご、申し訳無程度の日燈灯、単光灯の代わりに天井に裸のまま取り付けられたものだ。理由は分からぬが、電車の速度に合わせて灯いたり消えたりする。停車時にはまじまじと灯いてはいない。扉の傍に立っただけで、電車が速度を増したときをを狙って、比較的光りいなシートに座るのだ。

しかしこの路線には乗る人、オレはほとんども反対なのだ。妻のいむわが家への道のりを、かみしめる気分になるからだ。車窓からの夜景もなかなかきれいだった。街中にある『転写』の「コト」を思ひ出すとソツとするが、それで

指す固有名詞、隘口を叩かれるときのあだ名のことになってしまった。

ときどき思う。オレは、もはや周囲から笑われるだけの存在なのか。とオレと同じく転写を使わない者ばかりにいるが、どうしても相容れない。大体が宗教家か文明を嫌う偏屈者、最悪の場合反動政治団体だ。オレはさしたる信仰心もないし、パノミアも一般業務程度なら使いこなせる。思想を言い訳にした暴力なんてもってて他だ。

偏屈者はともかく、集団は困る。いたって少数派、しかも大方は反体制側の集団が転写反対を唱えているので、オレ自身はますます周囲から白眼視されてしま。いい迷惑だ。彼等は反体制の頭数を増やすためだけに、それを常套句にしているに過ぎない。

そんな見地からではなく、個の生死自体の危惧から反対を唱える者は非常に少ない。

まったく、オレはどつしようもなく孤立している。

仕事を終えて、今日も廃業寸前の、鉄道の駅に足を運ぶ。

改札前に設けられた華やかな転写ブースセンターを通りすぎると、恐ろしく年老いた改札員が、震えた手で切符を、切る。自動改札をくぐるのも、スタンプを押すのでもない。彼はずっとこの駅の変遷に立ち会ってきたのだらうな。多分死ぬまでこの時代遅れの交通機関に付き合いつつものなのだろう。

改札を抜けると、実に寂れた世界が体を包み込む。異臭、「ミ」埃、壁は、『転写反対』の「コト」が何枚も闇雲に重ねて貼られていて、剥がれかけのものは風化しているもあり、その主張がよけいに空しく感じられる。ホームにはオレと、一人の少し乱調気味な老人しかいない。やがて彼が意味不明の叫び声を何処へともなく発し続ける中、二両編成の電車が五

も今日の仕事は終わり、オレは家に帰るまでの道のりと時間をここでゆっくりに費やすことができるのだ。

懐中手鏡を覗きかけても構わぬ。言わずにはこの時間はオレに代わって、おだやかな祈りの時だ。通勤ラッシュが空り前の時代には、こんな気持ちになることなどなかつたはずだ。あの頃の通勤時間は、ほぼ強制的に必要な時間だった。今のオレは自主的にこの優雅な時間を選び、満喫しているのだ。そのはずだ。

**結語** 　よくあることなのだが、家の最寄り駅の手前で電車はストップした。少一時間ほど自分の足を動かさねばならなくなつた。

歩く、なめて素敵な言葉だ。だが、この言葉もほとんどその範囲を狭めてきている。水戸黄門の歌詞や結婚式の祝辞程度に使われる。形式上の言葉になつていくのだらう。昔、『汽船』、『船』が普段口々に使われなくなつても、情緒を醸し出すためたびたび歌の中の世帯に登場場としていた。その辺りを作詞家の連中もよく心得ている。今やその「コト」の曲、『転写』が歌われた試しなど、無い。隆盛を一瞬で通りすぎたボケヘルよ、情緒が無いとは、おもしろい。

『コト』は、『切符を切らぬ』は、なかなか通りのいい言葉だったよ。

「……」なかなかやつかみ半分の自己正統性を誇って、「おっ、家になんじり着いた。ななてつた。オレは、歩くことを楽しめるオレ」を大事にするあまりの、『歩へんことを楽しんで』を忘れていた。損した。あ、損。待てよ、今損したと聞いた。転写を使っている奴に負けたことにならぬ。いや、なかなかつかみ半分のことを考えたものだ。人間たまたまの自由な時間を持つてた。自由な茶室を広げることがなかなか……。その……」

「……」なかなかいい煩悶をすすべに吹き飛ばしてくれたのは、妻の笑顔だった。

「お帰りなさい」

ああ、何という笑顔だ。まさに毎晩起る奇跡のようだ。

「また電車がストップしてね」

「それは大変、大丈夫でしたっ」

「この駅の近くだったんで、大したことはないよ」

この二十年間、本当に尽くしてくれたオレの誇りの妻だ。二十年間いっつても、十年ほど前から、転プが世に出回り出した頃からの方が、より妻への想いは強くなっている。妻は、オレが転プを利用しないこと、引いては出世コースから完全に外れてしまったことに関して、ただの一度も不平を漏らしたことが無いからだ。

そいつ、すいぶん昔、こんな装置が世の中に出来たときに、話したことがあった。当時のオレは自分で言つのも何だが、怖いもの知らずの腕利き言葉マンだった。そんなオレがこの機械について

『怖く』

と妻に言ったのだ。妻にはオレの言葉が異常なものに聞こえたかもしれない。当時のオレも本当の弱音じゃなくて軽い気持ちで言ったのだが。

あの言葉はオレの末路と、オレと共に人生を歩む妻の運命に対する予言でもあったのだ。

それを妻は、受け入れてくれた。今もなお、それは続いている。妻は転プの話は一切オレにしないし、明らかにそのことを避けている。テレビで転プ関連のニュースやCMが流れると、オレ以上に顔を強はらせて部屋の間を眺みつけたり、ひどいときにはチャンネルを替えたりするのだ。そしてオレには取り繕つよう、優しい声を掛けてくる。巨大な敵に、妻という味方を得られたように思えて、頼もしい。絶え間無く寂しい人生の中、わずかな、しかし確かな光を感じることができたのだ。

破瓜  
オレには子どもがいなくてよかったと思ふ。こんな人口の二パーセントにも満たない、転プ非利用者、子どもは誇りに思う暇など無いのだ。

破瓜  
夕食の後、妻の淹れてくれたコートを楽しんだ。

「やっぱり家で飲むコートが一番いいよ」

使い古したこの言葉を、妻はいつも嬉しそうに聞いてくれる。

妻は最近始めた編物を広げ始めた。

セーターかな。

部長から海外出張を命じられたのは、この二週間後だった。

ガタガタガタガタ。

オレは今飛行機の中にいる。ちなみにさっきのは擬態語じゃなくて擬音語だ。飛行機が嫌いでオレが震えているんじゃないやなくて、離陸以来ずっと飛行機自体が震えているのだ。

予期してはいいた。部長、この男もオレの同僚だったが、に出張を告げられて以来、飛行機を利用する危険性についてはゆちゃめちや懸念していた。転プで廃れたのは、電車やバスだけではない。一番打撃を受けた交通機関は、最も新しく、最も速く、最も早くまで人間を運べる、いわなのだ。航空会社の株価なんて、とつくの昔に顔面割れして、今は雇用問題からだるさ、仕方なく何便か飛ばしているに過ぎない。あ、もっとも第一線のパイロットやスチュワーデスなんてのは、さっさと見切りつけてこの業界から去っていくってさ。だからこそ、怖いのだ。

しかしながら、オレはいついってもこの飛行機に乗らねばならなかった。部長がわざわざ手配してくれたのだ。彼はオレへの憐みや優越感を押し隠して言い切ってくれた。

「これがオレにできる、君への最後のチャンスだ」

そじゃ隣国の話手はマスターしていた。以前に何度か行ったことかだ。

反対に、もしオレの我欲から、彼を、転プ非利用者、として育てたとしても、彼が悲惨な人生しか送れないことは明白な事実であり、それはできない。オレは、強いて言つたら、人類の進化から遠ざかった淘汰されるべきものなのだ。

そして妻は

ああ、オレは、妻が、淘汰されるべきもの、だなんて、思えない。しかし実際のところ、どうなんだろ。

彼女がそれを使っているかどうかは、オレが何年も聞けず仕舞いになっていることなのだ。

もし使っていないなら、非常に少ない確率だが、彼女はオレと同じ古いタイプの人間で、この人生の旅路を、奇跡的に巡りあった伴侶と共に過ごしているに過ぎない。あるいは、夫であるオレの意見を受け止め、夫婦であるが故自分もその制約を甘受している、か。

もし転プを使っているのなら、せめて夫と一緒にいるときには彼の嫌いなそれを一切口にしない、自分は利用しているという罪悪感の反動から、その場しのぎの優しさを見せているのか。

しかし、オレにとっては、こんなことほどつてもいいんだ。

これ以上、妻に求めることなど何も無いのだ。妻は十分にオレを愛してくれている。それで十分じゃないか。それに……こんなことを聞くのは怖いじゃないか。妻がそっくりコートを入れ替わつてるなんて。

オレは転プが広まって以来、すっかり怖いものが増えてしまったようだ。ええい、いまいましい。

しかし、オレは自分一人の思惑で、人間社会の推移をねじ曲げるつもりは毛頭ないし、その方法も、全く思いつかない。今は、少しでも居心地のいいように人生を送られたらそれでいいんだ。

しかしそれだけならいくらでも代りがあるはずだ。オレでなくちゃあいけない、なんて仕事でもな。

しかもこの国には陸境はない。転プ以外の交通機関では、飛行機が船でしか渡海できない。船はこの場合考えに入られな。一週間に一度の便、そのために日程を調整して……普通はもつこんな間抜けなことはいないのだ。転プで現地に行けばいい。それをわざわざ、オレに差し向けてくれた。

「いついっただよをわざわざしてへやるのは、そろそろオレの肩たたきが始まったことごとだ。自分の惨憺たる業績から見れば、百も承知のことだったが……。まさかこんな不合理な方法を取るとはわ。

彼もオレがこの仕事を受けるとは思っていないかったんだらうが、そうは問屋が卸さな。

「こっちにも生活があるんだ。転プの使えない中年に再就職先などある訳がない。冗談じゃねえぜ、全……オレは上着を脱いで、ベストのワンピースを眺めた。こんな細い糸糸でよく編み込んだもんだなあ。妻は最高だ。簡単に辞めれるもんか、そう、彼女のためにも。

飛行機は予定の時刻になっても、着陸態勢に入らなかつた。

とつよりは、着陸態勢を回避してつても二度中途半端に高度を上げて、延々と空をぐるぐる回っているようだ。掃除のおばさんにも似た大阪弁のスチュワーデスは、空港のスケジュールが乱れたんちゃうか、と聞いていたが、それも怪しい。スクラップの飛行機が時折り置き去りにされてはいるが、空港なんていつもカラス透きじゃないか……。

まあ、昔から飛行機に乗るときには少しナーバスになるし、オレの考えすぎかな、と思いつつ、こととした先

やけに詠りのきつい、機長のアナウンスがあった。どうやら何本かの車

輪が出ないらしい。

乗客の顔が一気に凍り付いた。

こうだった時、自分の取る行動には笑ってしまつて、オレは自分がどういうリアクションをしたらいいのかわからなくて、ただ周囲を眺めていた。しばらくは、みな一様に唖然としていたが、太った男が立ち上がった。スチュワードに、「機長を呼べ」と怒鳴ったのを皮切りに、各自それぞれ、緊急事態のマニュアルを読んでもそのうちを点検し始める奴、無理にリアクスしようとしたらしい、最初から付いてない音楽サービスに怒り始める奴、結構いたのが、手帳などに何やら書き付けている奴、モバイルパソコンとかPDAなんか使っちゃ逆効果だつては、隣の奴、なんでゲームなんかし始めるんだ？、おいおいそこは喫煙席じゃない……。

しかしそんなに笑ってもしられない。自分自身に降りかかった災難には間違いないのだから。何が飲んで気持ち悪さを落さず着けよう。スチュワードを呼んで、水割りを頼んだ。飲料のサービスさえ無くなってしまつていることをうっかり忘れていた。

「え……そしたらお客様さん、私と一緒に飲んでくれはる？、ちょっと内緒で、持つてきますね。」

断つた。今スチュワードに酒を飲まれては困る、生き残る確率は増やそうよ、そんなことを言うて説得した。このおぼさんは本っぴな顔をして去つて行つた。だいたい死ぬがもしれん時に、妻以外の、こんなおぼさんと酒を飲むなんてオレには考えられない。ちなみに、妻は全くの下戸で、だからオレも家での晩酌はコーヒーにしているのだが。

しかしあのおぼさんも、一人の人間としては不安なのだろうなあ。だいたい、あの体たたくからして、スチュワードとしてのまともな訓練など受けているはずがない。だから周囲に気を配る責任感より先に、自分の逃

げ場を探してしまつただろう。オレの逃げ場は？

またベストのワンポイントに目を遣らうとした時、いきなり機体が斜めに傾いた。さっきのおぼさんスチュワードとまた口論していた機長呼べオヤジが、抱きあつて横に吹っ飛んだ。

このまま墜落かとも思ったが、機体は下降している訳ではなかった。強引な旋回だった。

「え、ただ今本機は、遠心力でもつてでえなや、車輪を出そうと、まアこうゆつ訳でしてエ、ハイ……どおりやああああ……」

この機長であるオヤジがどこ出身かさっぱり分からなかったが、まあ大方の事情は飲み込めた。まだ脚は全然出てなくて、このオヤジは明らかに、全部で五本ほどのジャンボジェットの脚のいくつかが、さほど期待はできない旋回運動で、出る、と思ひ込める奴で、それはあるアクション映画を週末のテレビで見たからで、この映画に出てきた複製機は、急旋回で脚を出すことに成功していたが、ジャンボジェットでそれと同じことを彼がやりたがつている訳で、あんまり脚が出る確率とは関係ない訳で……。

「オレ、死ぬ、なあ。」

イヤした機長の操縦で、乗客は一層八ニクに陥つた。オレが頭の中で赤信号を灯したより先に、他の客は口々に喚き始めた。静かな奴もいただろうが、喚き散らす奴の声のほうが目立つのでこれは仕方がない。品の無い叫び声か泣き声三分の一、それをうるさいとか落さず着けとか言う声三分の一、念仏三分の一……。

あ、その言えはこんな非常事態に、簡単に対応できる救急員が、あつた。他でもない、送信専用の転づだ、あるのなら、今こそ使わなければな

破瓜  
らない時じゃないか。

確か最後尾にあつたはずだ、使つ決心もつかぬまま、席を立つた。後尾部を見ると、一人の男がトイレのような一室から出てきて、頭を抱えて呻いていた。横をすり抜けて彼の出てきた扉を見ると、「脱出用転移ブース」と書かれていた。しかし、扉は落書きで満ちて真っ黒、おびただしい暴力によってかなり変形していた。乗客全員の憎悪が、煮染められてくるかのようだ。

期待はできないよ、できないが、開けるしかない。案の定ブースの中は見なげぬは良かったと思わせるに十分だった。なんていうた。

オレはよろよろと席に戻り、周囲のようになってみつも無さ『回巻』を恨めしく見回した。そこにいる彼等が、直接転移を壊したとは言えない。だが似たようなもんだ。これでは自殺するのと同じじゃないか、こんな奴らに殺されるのか、オレは？

たまたまないな、オレは妻の「こたでもきえなや、こめなな、オレが転ぶとかいふものを使わないはかり、不慣れな思いをみせてしまつたなあ。オレが死んだら、君はどうやって生きて行くんだらう。あ、そうか、生簡保険。確か一億五千万、はははは、偉く書勢に掛けてたもんだ。アレ？、あーだめだ、去年転ぶカードを提示しなかったこと、非利用者なのがバレちゃつたんだ。いや、転ぶ非利用者じゃなくて、電車通勤者、か。こいつが免責事項になつちやつたんだ、確か他の交通機関も一緒くただったな、事後法じゃないかって、かなりコネたけだなあ。電車の通勤が危険視されるとはなあ。愛煙家の癌保険みたいな話だなあ。

え？、この旋回やめる？、今から胴体着陸するから避難姿勢をしてくれ？、それ、なつきからやめておくれ。

アレ、あなたの話だ？、と、とにかくあいつには死をせめても迷惑かけち

まつたなあ。なんせ海外旅行保険も高すぎて掛けられなかつたしなあ。そりゃそつだよ、誰が電話掛けるのに保険掛けるよ、航空会社も賠償やケつてくるとさうなあ。だって飛行機のメンテナンスも、ロクにしてないくらいだしな、なんてこんなに不便な世の中になつたのかなあ。いや、オレ以外のみんなは便利になつてさ、まあみんながハッピーだった、不幸面したオレなんて、いなくなつた方がいいのかなあ。

違つっ！

オレは妻のことを想っていたんだっ！

それにオレは彼女のためにさ、まだ死なじゃいけないの！、死ねないの！、

大体オレは彼女との生活のためにこれに乗つてさ……何で死ななさいかんのさ！、待つてろ、ちゃんと生き延びてやるから……。

大音量が起つた、後は覚えてない。

「おい、お客様さん、お客様さん、ババ！」

誰かがオレの肩を揺る、聞き覚えのあるその声は、選か上の水面から聞こえてくるようだった。オレの意識はその海の中を浮上していった。

「やつと起きなやつたけ、お客様さんが最後の乗客だすよ、あんたが出た、ワジも出れたの、つて。」

見上げた座らな複製の中、飛び込んできたのは、陽に焼けた初老の顔。

機長だつた。

意識を戻したオレは立ち上がろうとしたが立てなかつた。

「腰が抜けたかな、立てなやつ。」

「あつた、あつた、あつた、あつた、あつた。」

「すまない」  
差し出された手を借りてようやく立ち上がった。全情けない。死ぬことが大きな壁だった。さうきまでは緊張でびりびりしていたのに、生きている今は腰抜けか。しかし身体は全く無傷のようだ。五体の感覚もほぼ異常無じた。まだ朦朧としている頭を除いてだが。

「すまんけん、あそこまで急ぐつべや」  
手を離されて少しふらついたが、ここで弱音は吐けない。オレは生きるんだ。非常口には、何回もフィルムで見せられたあのオレンジの滑り台が付いていた。

「ここを降りる時にはですな」

「わかつてますよ、機長」

苦笑して機長の言葉を通り、オレは滑り台を滑り降りた。勢いが付きすぎた。ガスの圧力が低かったのが、思ったより滑り台はへこんでしまい、しかも手荷物がオレの行く手を塞いでいた。オレはしたたか足と腰を打ってしまった。

「あ痛」

滑り台の左側の壁にしがみつかながら、ずるずると機長が降りてきた。

「あんたは人の話を最後まで聞かんさけ、そがいなこととなりよるじゃあ」

「これは、避難用具か？ 危険用具の間違いじゃないのか？」

「負け惜しみもエエけん、早よ逃げんと爆発するかも知れんつしや」

「え」

「ほれ、道を塞がんと、早よ立ちんしゃい」

慌てて立てこもった途端、右足に激痛が走った。

「うがっ……」

「大丈夫かなも」

破瓜

客が一音に拍手した。機長はメエスト口張りのお辞儀をしていた。その言えはメチャクチャながらもオレ達を無事に帰還させたのは、何をあいても彼の操縦だったんだな。

「スチュワードのおばさんはさっきの機長出せオヤジにすりすりして一緒に拍半していた。酔っ払っているのか、一人とも顔が真っ赤だ。おばさん、どうして君が、オレより先にそこにいるんだ？」

オレは何か馬鹿らしくなると、燃えている飛行機を見ていた。しばらくして、右足の痛みを思い出して同時に、ある疑問が湧いてきた。隙を見計らって機長に聞いてみた。少し丁寧で。

「乗客に怪我人はいたんですか？」

「軽いカスリ傷と、あたま打った人くらいだとも、みんな医務室にムア行きなすったサア。匂い失うした人もあったけん、その人は空港側のレスキューさんが転んで病院を送りはったね。あ、その言えは、あんたも足怪我しちゃったね、病院行くけん？ ほんね、その、転ぶあるでや」

「いや、結構」

周りの乗客から失笑が漏れた。オレはいつもの侮蔑か思いつて表情を強はらせた。それを待っていたかのよう、機長はオレを論じた。

「そなたら変な顔せんでもよか。この人等みんな、転ぶが嫌いでツシの飛行機に乗ってくわちよるけん、ねエみなしゃい」

「転ぶそれにかぶりを振っている、その言えはそなただ。オレはなんだか照れ臭くなすた、何かか笑えてきた」

「そ、そつてしたねエ」

乗客達は皆吹き出して、笑い声が周囲に満ちた。オレも笑った。みんな必要以上に怖がり、今の文明を拒絶している者同族だったのだ。

「か」

「か」。 既に解けた。今、新たに生きてきたこのわだが、やはりは何なのだろう。

「っ大丈夫、何とか、走れるだろあ、あ痛くて」  
「ならいけん、ほれ、肩貸しちゃうけんね」

「、ありがと」

びっこを引き、機長の肩を借りながら、何とか走った。

「アレ？」

「どうした、機長」

「やばい、伏せるっちゃー！」

一瞬後、大爆音が轟き、すごい風圧を踵と膝間に感じた。がらんかんと頭の横五メートルに、飛行機の翼の破片が落ちてきた。

「機長……何で分かった？」

「……何か変な音が聞こえたべ」

「そっかい」

「ただの勘、みたいだっただけ」

這いつくばったまま、機長とオレは燃え盛る機体を見返した。オレが降り損なった滑り台が炎の中でぐちゃぐちゃになっている。

「ま、ただの勘だべさ……あ、いけんけん、また走ろつしや」

「どうして？」

起き上がりながら機長は答えた。

「隣のタンクに火が着いたらまた爆発つしや」

「ヤバイヤ、走れながらオレは、少し間拔な疑問を口にした」

「さっきは伏せて、今度は逃げるのか？」

「そっから先は、それこそ助っしや、あー！」

……空港のエントランスにせいでいながらたどり着くと、他の乗

っ？

オレも彼等と同じく、自己を大事に思つてあまり周囲から孤立した人間はすだ。あの時、脱出用の転ぶを確認しに行ったからだろうか。それだけで彼等とは異質だとも言い切れないが、考えよつては、裏切り者めたいなものかも知れない。あの時、オレは彼等を、転ぶ以上に憎悪したのだ。憎悪してまでも、生を諦め切れない自分が、そこにはいたのだ。

何のために？

我々は本当に、こんな力無い、自嘲の中に埋められることしか癒しを得ることではできないのだろうか？ もししたらこんな疼きは、ここにこの誰もか感じているのかも知れないが……。

彼等と一緒に笑っていて、オレはだんだんと、その場をとり繕っているような空々しさを禁じ得なくなってきた。

「いたつておとなりな空港内の医務室での診察や、手荷物などの賠償事項へのチェック、それから入国審査を受けて、オレが空港の玄関まで出てきたのは、夜の帳が降りた後だった。

「おーエ、アンダ、足つちやも、大丈夫ケエ」

後ろから手を掛けてきたのは件の機長だった。

オレは礼を述べた後で聞いてみた。あなたの操縦技術は素晴らしいが、どうも腕は落ちない。いつからこの仕事を始めたのか？

「いや、やばい、はれてもつたか、タクシーの運転手やせめて、誰からなつたになつちよるけん、パイロットやめさう話聞いて始めて始めたん、いや、今日の日は迫力だったべ、痛快、痛快」

「た、タクシー？」

「一流のパイロットさんは仕事替えして、いんようになつてしまつたけんね。会社も何が運転でけたらそれでよかんべちゅうことにしてもらしいんだぎやあ」

なんだ？ この業界では何が起つてゐるんだ？

しかし彼には合点がいった。あの車輪を出すやり方も素人臭い発想だし、この「運転手」じゃあ英語の無縁伝達も、今日のようにな測の事態には対応しきれなかつただろう。空港側の緊急態勢も遅れてしまい、あの大火上か。しかしこの機長、船長のよつな気概をもつていたことは、確かかなよつだ。

オレは何となくこの怪しい方言を操る機長が気に入つてしまつた。一緒に飲みにも行かないかと誘つたが

「今がら港さ行つてえ、船長さやるさかい、ダメじゃなもし」と返されてしまつた。忙しい奴だ。

「それよりあんだ、時間ねえべ。あんのパスを最終連絡せよ」「え？」

こんな時間帯に最終連絡、オレはしばらくときまきしながら考えた。これだけの大空港に降り立ちながら、オレは自分が文明の僻地に取残されてしまつたような気がした。

そつた。もう空港というものは、無用の長物でしかないのだ。オレが若い頃異国への期待を込めて入り、優秀な人材が四六時中活躍し、国々の首脳が降り立ち、芸能人が記者に囲まれ、こんなところで離婚する奴ささいた。それは過去の幻なのだ。もつターミナルだとがウイングだとがインターナショナルだとが言う横文字をええ、虚しい。今や都市の中心から離れたただの廃虚であり、遺跡でしかない。

破瓜 「……わしく、いくべ。あんだ、こねえと二晩ここで明かすことなるばう

社に連絡しても、もつ誰もいないだろう。二〇〇数年残業していたのはオレだけだしな。考えてみれば一般の通話端末なんてない、転フとネット端末だけだ。部長にメールでも送つておくか。無事到着、なんてね。予約してあるホテル。二〇〇ホテルさうな斜陽どころか凋落産業で予約したのは予算の関係で重屋のような得体の知れない……に連絡を入れる羽も、その手段もここにはなかつた。

いつしかオレは、暗闇に浮かぶ飛行機の残骸がいておしく思えてきた。おまえも、一牛懸命のころまで飛んで来たんだよね……。

喉が乾いた。また自動販売機が稼働していた。隣国の言葉で書かれたその缶コーヒートの蓋を開ける。蓋の形が変わる前。あの時は、まだ世界はここになに複雑じゃなかつたや。

ついでに、ななていもこじや。あまりに長い間人に飲まれたことを待たせや。また缶コーヒートは、とていへくに変質していた。ミルク成分が固まつていて、オレの鼻つ面を一気に襲つたのだ。

顔を手で拭い、なんだか酸っぱいにおいのする口の中の異物を夢中で吐き出した。底の製造年月日だな。六年も前じゃないか。動弁してくれや……。

一体何なんだ？

オレがこんな老人めいた郷愁に浸りつづ馬鹿やつてる間にも、世界は冗談めいた鼓動でなだんを振り果てていく。何の因果か、取り残された者はこの缶コーヒートのよつにみるみる変わり果てて、かえつて金返せ状態だ。身体中軋むまで自分なりに頑張つたところを、最後には胴体着陸で下カンド、憐れみは受けられても、決して賞賛はされない。

でた。

「ああ……それもいいな」

こを動いてはいけないような気になつていた。

機長は話にならないとでも言いたげにかがりを横に振りつづ、こう言い残した。

「わしもの。転フちやつは、どうも好きになれんので。大体飛行機も飛ばん世界なんか、ロマンのカケラもあらへん。しかし今日はちとドラマチック過ぎたかのつ……運者でな」

雄弁な文句の割に、機長は慌ててパスに走つていった。オレは彼を目で見送つた。フフ、ロマンが、こんなロマンじゃ命がいくつあつても足りねーぞ。どうもアイデンティティの崩壊しまくつた方言だつたなあ。ま、この転フ時代にロカリスムなんぞ噴飯ものだが、しかし一体何モンだ、ありやあ。

オレは、そんなことを考えつつ、奇る辺なく空港の玄関ホールに舞い戻つてしまつた。ほとんど明りの無い中、電源の入つていないエスカレータを、軋む足取りで見送りロフトへと登つていった。

傾斜の緩い横の階段を使えばいいのに、ついつい茶目づ氣を出してしまつた。若い頃を、似たような空港のエスカレータを、胸ときめかせながら昇つていった頃の自分を一瞬思い出したのだ。老いて、傷ついた身体には愚かななそり書きだつた。かえつて自分の時代が完全に終わつてしまつたような気がしてしまつた。

登り詰め、大きく開かれたガラス窓に近づくと、燃え尽きた機体が見えた。ロマンの死骸だつた。今日は現場復旧も取り調べもしないらしく、薄暗い滑走路に遠く影を落としている。

オレはがらんとした誰もいないロフトに唯一人腰掛け、しばらくぼたぼたとその残骸を眺めていた。

仕事の書類もモバイルパソコンも携帯電話も、燃えてしまつたなあ。会

オレは何が楽しくてこんな気持ちにならなかつたや。

……神よ、もしいるんなら教えてくれ。こんなことまで試練だなんて言つたのか？ それは強い者とか勝つた者とかの、弱者や敗者をねじ伏せる詭弁じゃないのか？ そんなにオレをいじめて、楽しいか？

それともこれは、あなたのお眼鏡に通つてゐるのか？ いや、神様は視力が悪いなんて聞いたことほねえな。とにかくよ、オレ、オレが確かに生きるときと生きていた時代そのものを含めたオレ、は、何だが、疲れ過ぎてしまつたよ。今や片意地も張れない。圧倒的敗北つてこた。その時代を共有してゐるはずの、乗客層……。しかし、彼等とは同調し得なかつた。見たくない自分を彼等の中に見たからかもしれない。その中、唯一尊敬できたのは……。

機長、この時代に転フなして人生を謳歌するには、あなたのよつなムチャクチャな個性が必須だつたんだな。オレはつてもそこまではできない、単なる小心者に成り下がつてしまつたよ。

オレは片手に、中身が残つたまぼの缶コーヒートをブラブラさせて、止めどなくオレの中の時代の滅びを感じてた。オレは目を閉じ、つづむいた。やがて少し開いた瞳の向こうに、パスのワンポイントがあつた。いくつかのハートマークを交差させ、その上に大きくゆつたりとした一つの波をあしらつてある。彼女のお気に入りのデザインだ。

妻、か。

このパスでも使用一回目にしてエラくホロホロになつてしまつたな。マジ、妻になつて言えないんだ。あ、これは飛行機が墜落したと言えないか。上着、機内に置いてきぢやつたな。

そ、そつた。彼女に連絡しないと、ってダメだ。さっきの会社の同じだ。

いつ。

頭を上げた視界の中に入つてくるとのは、ロペートの片隅で青く光る『転

『』だけだった。

終わいせまう。

オレは何者かに「こ」憑かれた「こ」で、その「こ」を指摘して「ら」い「ら」を「こ」て来て  
てしました。

「こ」向「こ」側「こ」

妻が待つてるー

出逢った頃、恥じらうような薄桃色の頬をじていた君

どんな時も、誰にも負けない微笑みを見せてくれた君

初めての夜、満面の喜びを満ちたその瞳に浮かべていた君

求婚した時、大きく瞳を貝開いてオレを映し込んでくれた君

結婚した時、どんな運命も一緒に歩いて「こ」つねうって言った君

懐妊した時、どんな名前が好きさうって聞いて少しはにかんでいた君

時おりおり、凝りすぎた料理に挑戦しては失敗してオレに謝った君

流産した時、病院のベッドでオレの胸の中ひたすら泣きじゃくった君

昇進した時、まるで自分のことのように喜んで夜中に「コイン」を買った君

その「あ」の時、

怖いなと言ったオレに、

その「ね」と答えた君

君がいたから、君がいたから、君がいたから、君がいたから、

破瓜  
社会の変化におののきながらも、二人でいる場所はいつも安らぎに満ち  
ていた。辛い歴史の中で、お互い酸も増えたけど、オレを見つめる優みき  
った君の瞳は、今もなお変わらなう。今のオレは、もじかしたら、オ  
レはそんな君がいたから、人間らしくなを失ったことなく今日までやってこれ

たんだ。

何を今更かと誰に笑われようが関係ない。オレにとって大事なのは  
君のため「君」のそばに「こ」なれた。「こ」の愛が新奇な文明に振り回され  
るなんて「こ」ならないよ。「これ以上オレのわがままで、君の陰を背負わせ  
る訳にはいかない。それに、たとえ死んだとしても、「こ」であっても  
も、オレは君を愛し続ける。これだけは確実だ。それだけで十分だ。そし  
てもう一度始めるとな。君とのロマンスを、より純粋な気持ちで。ねえ、  
これは敗北では、ないだらう。」「な」と言いつくれー。  
いやそれより、今はただ

ただひたすら

君に逢いたい

微笑んで欲しい

何度もシミュレートしてきたように、手が自動的に動く。囲碁  
を頭に付けて、暗記している最寄り駅の「フ」ナンバーを正確に入力する。目  
的地側の待ち数。ゼロ。高原子量。OK。すべてよし。実行ボタン  
に指を延ばしたとき「せう」と無我夢中の自分に「お」付いたが、結局その指の  
勢いを止めなかった。

いーや、やっちゃん。

低い唸りと眩しすぎる光が、オレを包んでいった。

破瓜

『破瓜』

1990～Aug. 29, 1999

Vertical Edition: Dec. 4, 2000

(Compact Edition: Apr. 16, 2001)

16

A. Matsui  
Saita City

Winged-White:  
<http://www.ne.jp/asahi/winged-w/ty/>